

農政産業観光委員会 県内調査活動状況

- 1 調査日 令和6年5月29日(水)
- 2 出席委員(9名)
 - 委員長 長澤 健
 - 副委員長 渡辺 大喜
 - 委員 河西 敏郎 山田 一功 飯島 力男 土橋 亨
 - 白壁 賢一 菅野 幹子 志村 直毅※河西 敏郎委員は午前のみ出席

欠席委員
なし

地元議員
午前

望月 大輔 向山 憲稔 寺田 義彦 佐野 弘仁 飯島 修

午後

望月 勝 笠井 辰生

3 調査先及び調査内容

- (1)【山梨県産業技術センター】
工業高度化推進事業費・工業試験費

○調査内容

イノベーション支援棟において、当事業の概要説明を受けた後、実験棟の視察を行った後、現地視察を行った。



(2) 【南巨摩合同庁舎・忍沢養殖場】
富士の介生産拡大事業費補助金

○調査内容（主な質疑）

問) 資料に富士の介の出荷実績と目標値があるが、令和8年度の出荷目標80トンは、令和3年度の養殖業者として数字のある13の養殖業者で目指すのか、それとも業者を増やして目指すのか。

答) 基本的にはさらに新規業者を取り込んでいきたい。ただ、この13の業者のうち現在出荷しているのは10業者なので、まだ出荷していない業者の供給拡大も図っていきたい。

問) 出荷実績と目標値で、令和4年度の実績値と令和8年度の目標値の間の年度の数値は示せるか。

答) 種苗の供給量を増やしても、出荷量が線形に増えていくわけではないので、1年単位の数字は置いていないが、年が経つにつれて、少しずつ量が増えていくことを内々に想定している。

問) 販路の拡大について、現時点でどのような計画を予定しているか。

答) 先ほど説明したシーフードショーは、今年度も行う予定である。富士の介は単価が他の魚より高いので、比較的価格層の高い料理店、ホテル、旅館を中心に計画している。

問) 先ほど養殖業者が限られているということだったが、その理由は。例えば、大きな水槽を作れば新規参入できるのか。

答) 魚の入る量は飼育する用水の量によって決まるので、新たに使える用水があればできる。

問) 廃業した養殖業者も、そのような水槽があれば新規参入できるのか。

答) そのとおり。ただし、廃業した養殖業者は条件に恵まれなかったところもあるので、難しいところもある。

問) 富士の介が出る前に甲斐サーモンや甲斐サーモンレッドという魚種があったと思う。これらの生産は、今後富士の介に変わっていくのか。

答) 本当は先に富士の介をデビューさせたかったのだが、水産庁の承認などが必要で、い

きなりデビューさせることができなかった。山梨県民はほとんど淡水魚を食べないので、将来的な個人向けの販路を開拓させる狙いもあり、甲斐サーモンを先にデビューさせた。

養殖事業者がかなり限られていて、甲斐サーモンと富士の介を両方扱っている業者もいるが、やはりどちらかにしないと扱いきれないところもあり、今は徐々に甲斐サーモンから富士の介に切り替わっている状況。今後は富士の介のウエイトが増えていくと思われる。

問) 令和3年度で養殖業者が13ということだが、このうち富士の介を生産している業者はいくつか。また、富士の介のみを生産する業者はいくつか。

答) 13業者とも富士の介を生産している。また、13業者とも他の魚種も生産している。

問) 西桂で都内の大企業が陸上養殖をやっている認識だが、その辺りは県で何かサポートしているか。

答) 県の部署とすると、産業政策部と農政部で参入するまでのサポートをしている。また、陸上養殖に関しては、昨年法律が変わったため、参入後は法律に基づく助言等を行っている。養殖の技術自体は民間の会社自身が持っているので、その部分でのサポートはなかなかできない。

問) この業者は富士の介も生産しているのか。その場合、既存の業者との共存はうまくやっっていける見込みか。

答) この業者は非常に成長効率のいい選抜種のニジマスを生産しており、富士の介は生産していない。

問) 今後、この業者に富士の介を生産してくれとお願いするようなことは考えているか。

答) 富士の介については、県から作ってほしいとお願いしている状況。高コストで時間がかかるということがあると思われるが、作りたいという意向があれば中間種苗という形で提供していきたい。確かに陸上養殖より、湧水のほうがやりやすいが、陸上養殖を否定するものではない。

西桂の養殖場に関しては、工場に当たるため、例えば、農地転用とかそういったところでも協力したい。県のスタンスとして、富士の介の生産量を増やすため、できる限り協力したいということを理解してもらいたいと思う。

南巨摩合同庁舎大会議室において、当事業の概要説明を受けた後、忍沢養殖場の現地視察を行った。

